

《ニュルンベルクのマイスタージンガー》は、ワーグナーのオペラのなかで唯一の喜劇。明朗で勇壮な「第1幕への前奏曲」に続いて歌われるのは、主役の靴職人で歌のマイスター、ハンス・ザックスによるモノローグ「リラの花が何とやわらかく、また強く」。若い騎士ヴァルターがつくった新鮮な歌を、リラの花の香りに酔いながら回想する。

ワーグナー前半生の傑作が《タンホイザー》。タンホイザーの親友ヴォルフラムは、ローマ巡礼に行った恋人タンホイザーの帰りを待つエリーザベトを想い、格調高い「夕星の歌」を歌う。

作曲者が自らロマンティック・オペラと呼んだ《ローエングリン》。その「第3幕への前奏曲」は、目覚ましい勢いと美しい抒情が聴き手を惹きつける。

4部作の超大作《ニーベルングの指環》の第2部が《ワルキューレ》で、その最終場が「ヴォータンの別れ」。神々の長ヴォータンは、言いつけに背いてジークムントを救おうとした愛娘ブリュンヒルデを罰し、岩場に眠らせる。そして火の神ローゲに命じて炎を燃え上がらせ、「わが槍を恐れる者はこの炎を越してはならぬ！」と叫ぶ。ダイナミックな音楽は《指環》のなかでも屈指の聴きどころ。

ワーグナーと同じ年に生まれたイタリア・オペラの巨頭ヴェルディはシェイクスピアの戯曲をもとにオペラを書いた。《マクベス》はヴェルディ初期の傑作として知られ、その序曲は劇的かつ不気味な筋書きを巧みに表現している。ヴェルディ晩年の《オテロ》もシェイクスピアに材を得た大作。将軍オテロを破滅させようとするイアーゴが、副官カッシオを陥れるため、彼をオテロの妻デズデモナに近づけようと一計を案じる。その決意を歌う嫉妬と憎悪に満ちたアリアが「行け！ お前の目的はもう分かっている」。

20世紀ドイツの作曲家クルト・ヴァイルが、ブレヒトの戯曲に音楽を付けた《三文オペラ》は、ジャンルを超えた人気作。その冒頭、主人公メッキー・メッサーが手回しオルガンにのせて自分の悪事を面白おかしく歌うのが「メッキー・メッサーのモリタート」。

ヴェルディのオペラの台本を書いたボイトは作曲家でもあり、ゲーテ『ファウスト』に登場する悪魔を主人公とした《メフィストフェレ》は、ボイトの代表作。第1幕、ファウストの前にメフィストフェレが現れ、口笛を吹きつつ歌うのが「私は悪魔の精」。

20世紀アメリカを代表する音楽家バーンスタインは、《ウエスト・サイド・ストーリー》などの名作ミュージカルを書いた。《キャンディード》もその一つで、アメリカ的な開放感あふれる序曲は多くの人に親しまれている。

ミュージカルの黄金期には、《サウンド・オブ・ミュージック》を手がけたロジャース（作曲家）&ハマースタイン（作詞家）や、《マイ・フェア・レディ》で知られるラーナー（作詞家）&ロウ（作曲家）などのコンビが活躍した。本公演では、前者による《南太平洋》から「魅惑の宵」、後者による《キャメロット》から「女性の扱い方」をお届けする。それぞれ男女のロマンスを歌ったスタンダード・ナンバーである。

日本でもお馴染みの《屋根の上のヴァイオリン弾き》は、ジェリー・ボック（作曲家）による大ヒット・ミュージカル。ロシア領に生きるユダヤ人の生活が描かれ、主人公テヴィエは「もしも金持ちだったなら」と想像を飛ばたかせ、幸福への願いを歌う。